

講演テーマ「勢いのある体育学習の授業づくり」

○昭和 60 年代から体カテストの結果が下降

→生活様式の変化も要因。日常生活の中での運動が望めない。

⇒体育(特に『体づくり運動』)がその役割を担う

○『体づくり運動』でも、ねらいをはっきりさせて指導していく必要がある。きちんと整理して。

- 体ほぐし・・・気づき, 調整, 交流
- 多様な動きをつくる運動・・・結果として体力を高める。
- 体力を高める運動・・・その中で多様な動きをしていく。動きづくり。

→運動の技能の観点で評価

※中学 1.2 年生の体力を高める運動は、自分で計画を立てて実践。動きを身につけることは想定していない→技能の評価はしない

☆子どもたちがのめり込んでいく（体を動かすことが楽しい）授業づくり

～子どもたちの実態～

1 週間に体育以外で運動をする時間（小5）で 60 分未満（つまり 1 日 10 分未満）の割合

男子：9. 1%（そのうち、0分は54%）

女子：21. 0%（そのうち、0分は47. 5%）

運動していない！

どうすれば運動するだろう？

子どもたちの返答（運動しない子、体カテストの結果がD・Eだった子で共通した反応）

- ・好きな運動，できそうなものがあれば取り組む。
- ・友だちと一緒に取り組む。

日常的な運動の頻度をアップさせるために・・・

- ・まずは運動好きにする。
- ・運動ができるようにする。
- ・友だちと一緒に運動する機会を増やす。
(子ども相互のかかわり)

体育授業のあり方が問われている。

→基礎基本の力をつける。

友だちと楽しく活動しながら自分のめあてをもって取り組む。

～どのような授業をめざすか（目標・内容）～

- ・運動好きにする。（運動の楽しさや喜びを味わわせる）
- ・基礎的な体力の向上，健康の保持増進
- ・知識・技能の習得—指導内容の明確化・系統性
- ・思考力・判断力・表現力等の育成
- ・「習得→活用，探究」の能力の育成
- ・言語に関する能力の育成

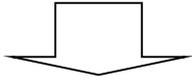
運動の特性をふまえた楽しい体育学習

・・・「楽しい」だけでは×。「勢いのある」とは、運動の特性をふまえた上での「勢い」

「わかる・できる」体育学習

・・・自分で考える力「どうやったらうまくいくか」「なぜうまくいったか」→「勢い」に通じる

コミュニケーション能力を高める体育学習



～授業としてどう実現するか～

○指導目標・内容を明確にする

- ・子どもの活動目標と指導者の指導目標（達成目標）は同じではない。指導者として何を習得させたいのかが指導目標。指導目標を子どもの具体的な活動目標に仕向けることが重要。
- ・指導目標・内容・方法の一体化・・・子どもが、自分の動きがわかっていないといけない
- ・教材づくり

○「教えたこと」を「学びたいこと」に

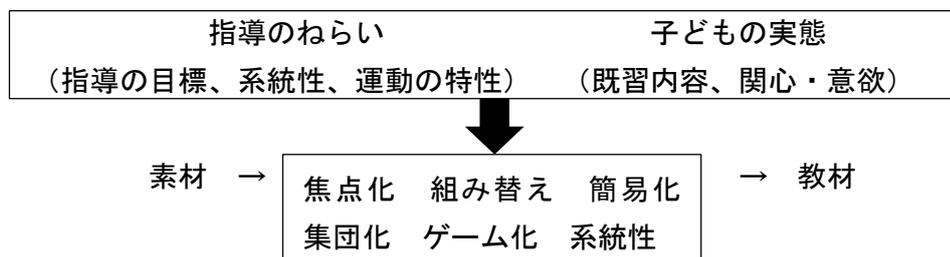
→子どもが、課題をもてるよう（学びたいと思うよう）に仕組む。

- ・学習課題の持たせ方
- ・学習過程（授業の山場）
- ・場づくり
- ・教師の問いかけ

〈 後半 〉

1 教材づくり

(1) 素材を教材に



○素材をそのまま教材にすることは難しい。素材を教材にしていく。

○どの子ども、運動の楽しさを味わえるように、教材をつくっていく。

例えば、足の速い子ども遅い子ども、楽しめるように、

足の速い子ども遅い子ども、目当てをもって全力で走るように、

足の速い子ども遅い子ども、走り方が高まるように、「8秒間走」をする。

・焦点化・・・例えば、バスケットの3on3のように、ゴール前の動きにしぼる。

・組み替え・・・例えば、走り高跳びを競争型から達成型に作り替える。

「自分がどれだけ跳べたか」「自分がどれだけ伸びたか」の学習展開に。

他には、陸上運動系の8秒間走など。

・簡易化・・・バスケット → ポートボール

サッカー → ラインサッカー

・集団化・・・集団マット、集団跳び箱など。

・ゲーム化・・・シュートゲームなど。

・系統性・・・学年段階に応じて、適切な教材にしていく。

(2) 「わかる・できる」学習

○「何がわかり、何をできるようにさせるか。」を考えるのが、『授業づくり』であり、
そう仕組んでいくのが、『教師の働きかけ』である。

○「わかる・できる」の学習が成立するために

・本時に「何をわからせるか」「何ができるようになればよいか」が指導者に問われる。

良い授業の規準のひとつが、それが「指導案に明確に表されているか。」「本時目標に具体的にかかげられているか。」である。

2 場づくり

○学習の目標、内容を追求しやすい場づくり

○意欲づけや課題解決がしやすい場づくり

○個に対応できる多様な場づくり

・ハードル走のインターバルを変える。高さを変える。

○苦手な児童も楽しめる場づくり

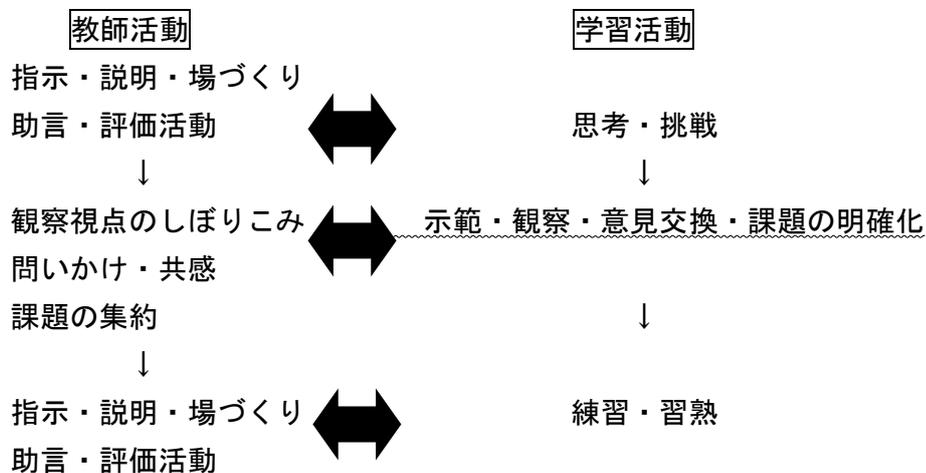
・走り幅跳びで、ロイター板でふみ切り練習をする。

- 子どもの目線に立った場づくり
- 器機、器具・用具等の配置（学習の場のディスプレイ）
- 効果音の活用（BGMなど）
- 安全性
- 場の意味を子ども自身が理解する。
- 場づくりは、万能ではない。弊害が生じる危険性もある。
 - ・坂マットだけで練習していると、腕支持が意識されにくい。有効な場づくりも、そればかりしているとマイナスになる。

3 学習過程・学習場面

(1) 「わかる・できる」にするために、ヤマ場をつくる。

〈授業のヤマ場での学習活動と教師活動〉



(2) 教師の言葉かけ

- 指示・説明（簡潔に）
- 助言・共感
- 問いかけ（意識の方向づけ、ゆさぶり）
- 指示的評価活動（肯定的評価によって）
- 適切な言葉かけをすることで、学習が勢いづいていく。

4 子ども相互のかかわり合い

- 社会的関係 = 道徳的価値規範の指導
- かかわり合いの中に、主体的学習が展開され、一人一人が伸びていく。
 - ・課題や学習方法の見通しを持つ（→わかる）
 - ・競争心や憧れなどによる意欲向上（→できる）
- 心の解放とコミュニケーションの成立
- 学習内容とのかかわり合い

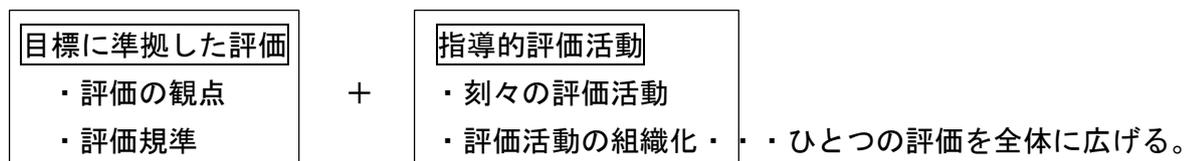
○かかわり合いによって、個人を尊重する。

これが、授業の基盤となる。

5 評価（指導と評価の一体化）

○指導したことを評価する。

○評価の結果によって、指導を改善し、新しい指導の結果を評価する。（P D C A）



6 まとめ

○「わかる・できる・かかわり合う」体育学習に。

○運動の特性を生かした、楽しい体育学習にする教師活動7つのポイント。

①教材づくり

②場づくり

③学習過程

④学習場面

⑤指導的評価活動

⑥指示・説明

⑦子ども相互のかかわり合い

○体育の授業で、健康づくり、体力づくり、学級づくりを。

○機械的でない、手づくりの体育学習を。